

令和元年6月18日現在

機関番号：34415

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2018

課題番号：15K03045

研究課題名（和文）地域活性化とアート活動の親和性に関する民族誌的研究：瀬戸内海離島地域の事例から

研究課題名（英文）Ethnographical Study on the affinity between regional revitalization and art activities

研究代表者

山田 香織 (YAMADA, Kaori)

追手門学院大学・基盤教育機構・大学常勤講師

研究者番号：50731832

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では2010年頃より日本国内各地で開催されている地方開催の国際芸術祭の地域振興との親和性を考察した。着目したのは、従来の研究では十分に扱われていなかった開催地に暮らす人々と会期外にまで及ぶ時空間で、彼らが期間中と期間外において、芸術祭等のアートプロジェクトにどのように関わっているのかを参与観察や聞き取り（エスノグラフィ）によって把握することに取り組んだ。複数にわたる研究成果のうちの一つは、本研究調査対象地でみられたある出来事を手がかりとすることで、住民たちが、外部から持ち込まれた地方国際芸術祭という文化をローカル化するプロセスを捉えることができたことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

【学術的意義】従来の地方国際芸術祭研究は、会期中の動きに注目した研究、実施主体による成果報告、アートの意義の検討、量的研究に偏重していたが、本研究は住民に着目し、かつ会期期間外にまで調査時期を広げ、質的研究を展開したことで、一連のプロセスを微視的に捉えられた点と、芸術祭やアート活動が当該地域にもたらす新たな文化創造の様相を提示することができた点に学術的意義があるといえる。

【社会的意義】地方国際芸術祭のローカル化が示唆するアート活動の実践の意義、その動きを創出するために必要な人材、その人材が備えるべき資質の明示は、これによる地域づくり実践の充実の一助になると考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to consider affinity between regional revitalization and art activities, particularly international art festival (Triennale) in rural area in Japan. I used ethnographical method, and my main question was how the people who live in the Triennale's places participate in art projects. One of study results is that I could observe a process of localization of the culture from outside "Triennale".

研究分野：文化人類学

キーワード：地方国際芸術祭 地域振興 ローカル化 民族誌的研究 エスノグラフィ 日本 瀬戸内地域

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

トリエンナーレは3年に一度開かれる国際美術展覧会で、国際交流やまちこし、観光客の集客、多様な国の多様な芸術に住民が触れることを目的としている。日本においては1990年代前半より各地でトリエンナーレが開催されており、本研究が対象とする瀬戸内海離島地域では、2010年と2013年に、瀬戸内国際芸術祭(以下、瀬戸芸)が開催された(第3回(2016年)開催もすでに決定)。瀬戸芸は、「民俗、芸能、祭り、風土記という通時性」と「現代美術、建築、演劇という共時性」を交錯させ、瀬戸内海の魅力を世界に発信するプロジェクトで、「美しい自然と人間が交錯し交響してきた瀬戸内の島々に活力を取り戻し、瀬戸内海が地球上のすべての地域の『希望の海』になることを目指している。アーティストは、会期前から作品を発表する島に暮らし、島民の暮らしや景観、生活のなかに潜む課題を読み取り、それを解決/表現すべく、制作活動をすすめていく。作品はオブジェのほか、島民の生活環境に密接にかかわる空間設計、パフォーマンスといったかたちでも発表されている。つまりこの芸術祭は、芸術活動を通じた地域活性の可能性の実証実験であり、この祭典の舞台である瀬戸内海離島地域は、その実験の現場と捉えられるのである。(株)日本政策投資銀行と瀬戸内国際芸術祭実行委員会の調査分析によれば、瀬戸芸会期中、島々には94万人(第1回)、107万人(第2回)(いずれの延べ人数)が訪れた。経済波及効果は、第2回で約132億(第1回比19%増)にのぼっている。さらに、アンケート調査によれば、観光振興・交流人口の拡大や地域の活性化の側面からみても、瀬戸芸は開催地にプラスのインパクトを及ぼしている。ここから、瀬戸芸開催には肯定的評価が下されていることを読み取ることができる[(株)日本政策投資銀行・瀬戸内国際芸術祭実行委員会 2013]。

瀬戸芸の評価は学術的にも進められてきた。本研究とも関連のある地域活性化を焦点化して先行研究をみると、いずれの研究においても、島民が瀬戸芸実施を概ね肯定的に捉えていると結論づけている。しかし、量的な調査(アンケート)に基づいて分析がなされているため、結論が予定調和的に導き出されている感が否めない。あるいは、瀬戸芸に関与したアーティストやディレクターからもこれに関して著作を著しているが、そこでは、アート活動の意義や可能性を論じる傾向にあり、必ずしも地域の声を十分に掬い上げるには至っていない[中島 2012、原 2011、椿ほか 2014 et.al.]。

2. 研究の目的

上述の背景に基づくと、従来の議論では、瀬戸芸に関わるアクター(アーティスト、行政、実行委員会等)と研究者は、瀬戸芸に人口減少・高齢化の進む瀬戸内海離島地域の活性化の起爆剤としての意義を見出しているわけだが、その意義の真価を問うにはもう一步踏み込む必要があるのではないかと。本研究実施者の専門領域からこの問いに迫るならば、従来の議論で等閑視されてきた、瀬戸芸期間外のいわゆる「ケ」の時空間にまでまなざしを注ぎたい。その時空間における島民の日常生活の変化、会期中に立ち現れたアートに関する「動き」のその後の展開を微細に観察することで、地域活性化と芸術活動の親和性の真価がより多角的・多層的に検証できるのではないだろうか。

本研究では以上の問題意識の下、「ケ」の時空間である瀬戸芸閉幕後の瀬戸内海離島地域の島民の生活世界に民族誌的手法によって接近することで、島民の視点から捉えた瀬戸芸開催の意義、ひいては地域活性化と芸術活動の親和性を考察する。

3. 研究の方法

(1) 当初計画

本研究は、瀬戸内国際芸術祭の会場となるある離島を主たる調査対象地とし、民族誌的調査研究をおこなうことで、本研究の問いの解明に取り組む。3年間にわたる調査研究では、瀬戸芸に関する全体像の把握、対象とする島の基礎情報（センサス、組織、社会関係等）の把握、調査対象とする島の瀬戸芸の実施概況と島民の関与の様態の把握、瀬戸芸期間中の島と島民の生活の変化の把握、瀬戸芸期間中にみられた島内の変化の閉幕後における継続性／変化の観察をおこなう。あわせて先行研究を渉猟し、国内外の類似事例の調査研究を通じて比較参照点を養うことで、本調査フィールドから立ち現われる事象の特徴を捉え、解釈を進める。

(2) 実際の研究推進方法

上記計画に従い、以下のとおり民族誌的調査研究を展開した。

<1年目>

瀬戸芸とその舞台となる地域に関する基礎情報を収集し、続いて、隣接分野にまで視野を広げ国際芸術祭をはじめとするアート活動全般と地域振興に関する先行研究を把握した。現地調査では、第3回瀬戸芸の会場となる離島12か所のうち9島を訪れ、聞き取りを交えた予備的調査をおこなった。その結果、アソシエーション活動への着目、当初調査対象地として想定していたある離島に加えて、もう1~2か所を比較参照点として調査することが有効であるとの見解に至った。瀬戸芸実行委員会が実施にあたって「お手本」とした越後妻有大地の芸術祭の現地調査（視察及び聞き取り）も行なった。このほか学会・研究会に頻繁に出向き、アート活動ならびに地域振興、これに関連するテーマに関する最新研究動向の把握、研究者・実践者とのネットワーク構築と議論を積極的におこなった。

<2年目>

第3回瀬戸芸開催年であった当該年度は、会期前・中・後に現地を訪れフィールドワークを実施した。ボランティアメンバーとして芸術祭を参与観察し、実行委員会や自治体関係者への聞き取りもおこなった。アート活動の現場を多角的に捉える視点を養うべく、国内外の芸術祭やアートプロジェクト（あいちトリエンナーレ、BEPPU PROJECT、エムシャークンスト（ドイツ）等）の現地調査と運営従事者への聞き取り調査もおこなった。また、得られたデータの理論化に向けて、研究者との議論、学会等での口頭発表などによる成果発表にも取り組んだ。

<3年目、4年目>

研究成果の公表と補足調査に取り組んだ。補足調査では、瀬戸芸実施関係者への補足的な聞き取りをおこなった結果、微細ではあるものの本研究テーマを扱う上では看過できない瀬戸芸をめぐる動きを捉えることができた。本研究3年目終盤頃より開始された第4回（2019年）瀬戸内国際芸術祭開催に向けた人材育成プログラムに参加し、参与観察をおこなうことで、今後のアート活動による地域振興の展開の可能性を探った。

4. 研究成果

本研究の主たる成果として、ここでは3点を挙げる。

(1) 地域文化観光の芽ばえ 「はみだしの実践」

瀬戸内国際芸術祭の会場となるある離島において、芸術祭会期中に限定せず、会期前・中・後における住民たちのアート活動やアーティストとの関わりについて質的調査をおこなったことで、微細ではあるものの検討に値する動きを看取することができた。そのひとつは、島民による「島の瀬戸芸アーティスト」指名の意向表示である。同芸術祭では通常、実行委員会が各島のアーティストや作品を選定していくが、本研究の主たる調査地である離島では、島の住民

が、「わたしたちの島のアーティスト」を「逆指名」という動きがみられた。こうした動きに至った背景には、三年に一度の芸術祭に加え、例年、自治体によるアーティスト・イン・レジデンスの取り組みが展開されていたことが大きく影響している。つまり、瀬戸芸期間中以外でも、島民は定期的にアーティストに接し、作品制作に携わっていたのである。この島ではこのほかに、瀬戸芸終了後に撤去が決まっていた作品の島民の自己負担による維持・管理という動きも見られた。作品の一部である「届け先のわからない手紙」が会期終了後も連日配達される状況に直面した、自身も作品の一部で、この作品が設置された建物の所有者でもあった島民が、作品管理と来訪者対応を自己負担で引き受けたのである。

本研究実施者はこれら事例にみられる実践を「はみだしの実践」と名づけ、この動きを外部から流入した非日常的な文化(=アートフェスティバル)の「ローカル化」のあらわれと捉え、さらに、橋本和也の理論を援用して地域文化観光の創造プロセスであると結論づけた。あわせて、こうした「はみ出しの実践」が実現する現場では、異なるコミュニケーションコードを有する者同士をつなぐための「通訳者」が果たす役割は非常に大きく、この役割を担う立場にたつ人物の「通訳者」としてのスキルの涵養が、地域文化観光の創造に必要な不可欠ではないかとの一応の結論に達した。

(2) 地方国際芸術祭のしくみの新規性 観光まちづくりと人材育成の観点から

国内で開催される主要な国際芸術祭を網羅的に捉えた上で、参与観察や聞き取り調査、文献研究に基づき、なかでも注目すべきサイトスペシフィックアートを扱う3つの地方開催の国際芸術祭について実施背景や運営体制、アクターの関係性等について整理・考察をおこなった。取り上げた芸術祭は、形態やバックグラウンドの異なる3つ(瀬戸内国際芸術祭(香川)・県と民間、混浴温泉世界(別府)・NPO、山形ビエンナーレ(山形)・大学)で、コンセプト、アクターの役割分担と連携の様態、プラットフォームのありかたを詳述し比較した。

結果、いずれの事例においても、リーダーによる明確な方針があること、プラットフォームの担い手(=アクター)が多様であること、ホスト/ゲストの関係は固定化されておらず、双方を往来可能なくみが備えられていること、アクターについても新規参入可能なくみが備えられていることが明らかとなった。芸術祭を契機とした市民力の涵養に重きをおく場合にはこれらに加えて、芸術祭と芸術祭のあいだの期間に、市民向け養成講座等を開催し、積極的な人材育成を展開している(これが結果としてアクターの多様化・充実にもつながる)こともわかってきた。

こうしたしくみのあり方は、アート観光の現場の創造はもとより、今日の観光まちづくり型の地域振興の現場の創造や、それにかかる人材育成のあり方を考える際に応用可能であるといえる。

(3) 次なる研究課題の掘り起こし アートツーリズム研究

本調査研究を通じて浮き彫りとなった新たな研究課題は複数ある。このうち、本報告執筆者が本研究を礎とし、現在取り組んでいる研究課題は、ツーリズムの視点にたったアートプロジェクト研究である。この問題設定は、次なるステージを迎えた地方国際芸術祭と開催地域の様態把握に際し、芸術祭を芸術祭たらしめるツーリズムの観点を看過することができないという実情に基づくものである。しかも、アートツーリズムに関する議論は意外と多くなく、民族誌的調査研究の試みはほぼ皆無であることから、これによって得られる知見には新規性がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 5 件)

山田香織 2018「地域連携による教育実践の人材育成」地域活性学会第10回研究大会、拓殖大学、174-177頁

山田香織 2017「地方国際芸術祭のローカル化と地域振興」地域活性学会第9回研究大会、島根県立大学、238-241頁

山本暁美 2017「地域広域芸術祭における住民小学生への影響 —「瀬戸内国際芸術祭」を事例として—」文化経済学会2017年度研究大会

山田香織 2017「アート作品を介した住民とアーティストの関係性 瀬戸内国際芸術祭の会場となったある離島を例に」観光学術学会第7回研究大会、神戸山手大学、33-34頁

山田香織 2016「行政主導型」アソシエーションによる地域づくり活動の展開の可能性」地域活性学会第8回研究大会、小布施町役場、172-175頁

〔図書〕(計 1 件)

山田香織 2019「アートプロジェクトにおける地域文化の創造 地方開催の国際芸術祭運営に関わる人びとの協働と住民によるアート実践」橋本和也編著『人をつなげる観光戦略』ナカニシヤ出版、144-165頁

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

シンポジウム：

山田香織 2018「橋本和也先生退職記念シンポジウム『ホスト・アンド・ゲスト：観光人類学』再考」パネリスト(招待)京都文教大学

報告書：

山田香織 2017「サイト・スペシフィック・アートプロジェクトから観光人材育成について考える 地方開催の芸術祭における運営体制に注目して—」橋本和也編著『観光まちづくりと地域振興に寄与する人材育成のための観光学理論』の構築「研究成果最終報告書」

京都文教大学、81 100 頁。

口頭発表：

山田香織 2016「アートプロジェクト活動と地域振興の親和性に関する調査研究から観光まちづくり人材育成について考える」「観光まちづくりと地域振興に寄与する人材育成のための観光学理論構築」科研研究会、キャンパスプラザ京都

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：山本暁美

ローマ字氏名：YAMAMOTO, Akemi

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。